慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	福建民俗紀行
Sub Title	Fujian folkrolic travelogue
Author	野村, 伸一(Nomura, Shinichi)
Publisher	慶應義塾大学日吉紀要刊行委員会
Publication year	2001
Jtitle	慶應義塾大学日吉紀要. 言語・ 文化・ コミュニケーション No.27 (2001. 12) ,p.45- 83
JaLC DOI	
Abstract	2000年の8月29日から9月14日まで，中国福建省の省都福州をはじめとして福建省北部の寿寧県から中部古田県の民俗紀行を試みた。また2001年2月にもふたたび北部の寿寧県下房村にいき，旧正月の事例を観察記録した。いずれのばあいも，わたしの紀行の根柢にあったのは全中国のなかでもかなり特異な発展を遂げた福建人の女神信仰の現場に触れてみたいということであった。媽祖はいうまでもなく臨水夫人陳靖姑は明清の時代にいわば大衆のスーパースターとなっていった。それはおそらくはその地の女性生活史の何らかの反映であるに違いない。こんな思いが旅の初めにもあったし，それは今なおありつづけている。 中国福建省の民俗についてはまだよく知られていない点が多い。一口に福建省とはいっても，南部や西部では女性が生活の諸方面で活躍をしたのに対して，北部や東部では男性を中心とした宗族の支配が強くいわゆる儒教倫理に基づく社会体制の下にあった。したがって，福建省の民俗を語るとき，その地域性については十分な配慮が必要である。そこで今回は，主に中部から北部にかけての女性の祭祀活動を中心にしつつも，そのほかできるだけ広く聞き書きを試みた。 以下では，当時のノートに基づいて，見聞した事柄を覚書のかたちで記してみたい。
Notes	
Genre	Departmental Bulletin Paper
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN10032394-20011207-0045

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

福建民俗紀行

野　村　伸　一

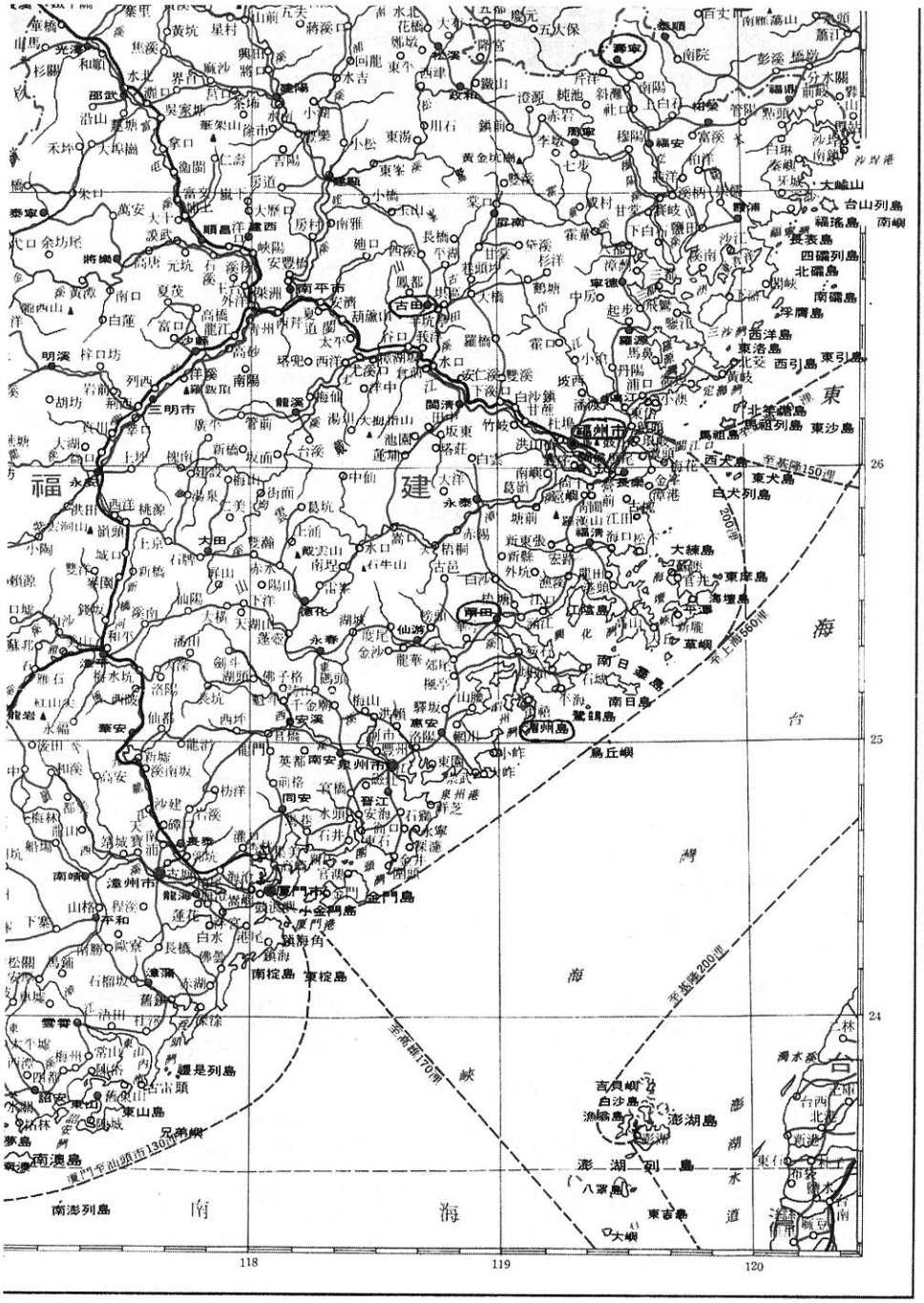
2000年の8月29日から9月14日まで，中国福建省の省都福州をはじめとして福建省北部の寿寧県から中部古田県の民俗紀行を試みた。また2001年2月にもふたたび北部の寿寧県下房村にいき，旧正月の事例を観察記録した。いずれのばあいも，わたしの紀行の根柢にあったのは全中国のなかでもかなり特異な発展を遂げた福建人の女神信仰の現場に触れてみたいということであった。媽祖はいうまでもなく臨水夫人陳靖姑は明清の時代にいわば大衆のスーパースターとなっていった。それはおそらくはその地の女性生活史の何らかの反映であるに違いない。こんな思いが旅の初めにもあったし，それは今なおありつづけている[1)]。

中国福建省の民俗についてはまだよく知られていない点が多い[2)]。一口に福建省とはいっても，南部や西部では女性が生活の諸方面で活躍をしたのに対して，北部や東部では男性を中心とした宗族の支配が強くいわゆる儒教倫理に基づく社会体制の下にあった。したがって，福建省の民俗を語るとき，その地域性については十分な配慮が必要である。そこで今回は，主に中部から北部にかけての女性の祭祀活動を中心にしつつも，そのほかできるだけ広く聞き書きを試みた。

以下では，当時のノートに基づいて，見聞した事柄を覚書のかたちで記してみたい。

8月29日

香港から中国東方航空の飛行機に乗って福州に向かう。飛行機のなかでは，台湾からの進香の一団がいて，そのなかの1人は童乩である。そしてまた信徒の代表とおもわれる人が神像をひざの上に恭しく抱えている。こうした海外からの進香団は，今日，福建省の各地でみられる。わたしの，2週間ほどの滞在の間にも，なお2つほどの団体にお目にかかった。かれらは神の故郷にいくのか，あるいは自分たちの故郷にいくのか。それは，い


福
建
東
海
台
湾
海
峡
南
海
澎
湖
水
道
福州市
厦門市
泉州市
漳州市
南平市
三明市
龍溪
南陽
古田
福清
長乗
白大列島
東犬島
西犬島
大練島
東澳島
海壇島
南日島
湄洲島
烏丘嶼
金門島
小金門島
鎮海角
南碇島
東碇島
澎湖島
澎湖列島
八罩島
東吉島
大嶼
吉貝嶼
白沙島
漁翁島
南澳島
南澳列島
東山島
銅山
詔安
雲霄
南日海峡
118
119
120
25
26
24

福建省地図

ずれ同じことであろう。今日この進香団の最も代表的なものは莆田市の湄州島にある媽祖廟への参拝である。媽祖廟およびその付近でみた台湾の人びとの熱い思い入れについては後ほどまた述べることにする（9月8日の項参照）。

福州ではかねて連絡を取っておいた葉明生氏と落ち合う。そして，市内東大路の東湖賓館に投宿する。ここは以前は文化庁関係者がよく利用したとのことであるが，今日ではかなり古びていて福州市内でも三流のホテルである。中国のホテルで面白いのは，入り口の表示には400元（5800円前後）から500元という値段があっても，通常はこの半額以下で泊まることができる。これは半ば常識で，おそらく表示された値段のとおりに泊まるのは初めて中国旅行をする日本人ぐらいであろう。このホテルは，いわゆる「単位」に所属している。この敷地内には，服務員たちの長屋風の住宅もあるし，また購買部や医務室などもある。さらにサウナ施設や旅行代理店のような会社もある。もっとも営業のほうは，かなりのどかな光景をみせている。

服務員たちの態度は，わたしが1990年に北京に長期滞在していたときに利用した友誼賓館のそれとあまり変わりはなかった。かれらは，およそ顧客中心とはいいがたく，まずは自分たちの生活を中心に服務しているようである。昼間，暇なときには客室のテレビをみたり，また受付では，なるべく貴重品などの保管を避けようとする。例えば，高額なビデオやカメラなどを預けようとすると，彼らは保管場所がないとか，保管はするけれどもカバンの中身が壊れた時には保証できないことを承知する旨，一筆をかけなどと要求もする。こうしたことは不都合な点もあるが，一方ではなんとなく懐かしさを感じる。もちろん福州市内では，最近は，完全に客本位のホテルもたくさんできているらしく，そのばあいには料金からして話はまた別である。

今日は葉明生氏，その友人の馬建華氏と食事をともにしながら四方山話をして過ごす。福州は今日，百万人の都市である。ここには，四川や貴州，雲南から働きにくる者たちが多いが，かれらのなかには職がなくて，野宿をする者もあり，犯罪も少なくない。それで路上では注意を怠ってはいけないという。

こうした話は莆田市にいった時にも聞いた。そこでは確かに路上に座り込んでいる労働者たちを何人かみかけたが，わたしには，それほど違和感もなかった。むしろ，市政府の敷地のなかから時折出てくる黒い豪勢な乗用車の方が異様にみえた。そのようなことを話すと，普通，中国の友人たちは，ただ笑うばかりなのであるが。

8月の終わりではあるが，福州市の気温は暑い盛りである。ときには35度ぐらいになるが，真夏の「酷熱」はそれ以上という。この暑さはわたしの滞在中，常々付きまとい，

そのたびにこの日の話が実感された。

8月30日

今日もつづけて東湖賓館に泊まる。今日は福州市の郊外にある鼓山にいき，そののち，かねがね気になっていた臨水夫人陳靖姑の生まれ所といわれる下渡へいってみる。下渡は市内の家が建て込んだところにあり，なかなかみつからない。細い路地にはいりこんで，ようやくたどり着く。小さな家の一間に陳靖姑の像がまつられている（図版1）（図版2）。あまり見栄えはしない。そこで事情を聴いてみると，確かに陳靖姑はここで生まれたということになっているが，証拠もないことから福州市はなかなか認めようとしていないという[3)]。伝承によると，ここ下渡から150キロ離れた古田の臨水宮まで，地下に水路があり，臨水夫人は古田と下渡を往き来し，さらに閩江のほとりの龍潭角では雨乞いをしたという。

そこでわれわれは龍潭角にいってみた。ここは閩江のほとりにあり，なるほどかつては，竜王に対して雨乞いしたであろうとおもわれるところである（図版3）（図版4）。聞けばここには何年か前に日本人の道教学者などもやってきて見学したという。閩江は福州市内を流れる大きな川である。かつては飲料水にも利用した。内陸部，特に武夷山方面との交通には欠かせない川であったが，次第に利用度も下がり，近年は川のほとりにパルプ工場などができたため，汚染がひどくなった。そこで現在，市政府は河川浄化に真剣に取り組んでいるという。

今日はこの龍潭角をみてから，さらに市内下杭路にある張聖君（道教閭山派の張法主公）の廟に立ち寄ってみる。宋代の建立というから，歴史は1200年にものぼる。だが，文化大革命のときには工場になり，なかの神像などはすべて破壊された。この種の話は中国のどこへいってもよく聞く。張聖君は永泰県の人で，4歳のとき父が死に母は再婚した。そののち彼は牛飼いとして暮らすかたわら，道教を修め，さらに27歳のとき福州にきて東禅寺で出家した。張聖君は道仏をともに修めた道人で，「三十三天監雷天師」すなわち雨にかかわる神としてまつられている。現在，この廟は近隣の人たち40人ほどが集まり管理委員会を構成している。廟の前には演劇の舞台もあり，そのかたわらを小さな川が流れていてなかなか趣がある（図版5）。かつてこの近辺は富裕な者たちがたくさんいたという。奥行のある廟の空間，そして，祭日には舞台でさまざまな芝居がおこなわれたことを想像すると，かつてのにぎわいは十分に想像される。

ちなみに田仲一成氏は南宋の時代に福建ではすでに舞台を設けての演劇がおこなわれて

いて，しかも，それは当時の都臨安に較べても，かなり成熟した段階の演劇に近づいていたということを述べている[4]。そうした脈絡の上で，数百年のあいだ，この地の人びとはいったいどのくらいの芸能を享受してきたのであろうか。そしてさらにいえば，芸能の場に集ったのは多くは女性たちであった。

あすからは，いよいよ北部に向けて旅をはじめる。

8月31日

午前9時，福州市の北駅からバスに乗って北へ，およそ300キロほどの下房村に向かう。バスは旧式で蒸し暑いが，なんとか足を伸ばすことができるので，耐えられる。途中，道ばたの小さな食堂で，運転手ともども昼食などをし，午後4時過ぎ到着。福建省の内陸部はどこも険しい山が迫っていて平地は少ない。下房村に近づくにつれて，茶畑が目についた。福州市から北上して海岸部を走るときの蒸し暑さは，少し内陸部に進んでいくと失せていく。左右は山また山。なるほど福建省は耕地が少なく，人口の膨張に耐えられなかったわけである。近年でこそ，果樹栽培やシイタケ，茶の栽培で現金収入が得られるというが，かつては雑穀の栽培も難しかったであろう。

寿寧県にはいると涼しいほどである。ここ寿寧県は人口およそ30万人というが，目抜き通りは長からず，しかも適度に商店があって一応，何でも手に入りそうなところだ。今日は寿寧賓館に泊まる。

寿寧では3泊して，陳靖姑の祭祀を中心として聞書中心の調査をする予定であるが，なおそのほかに，この地の陳氏一族についても聞書を取るつもりである。

特に注目しているのは，寿寧県の下房村では，正月に陳氏一族が陳靖姑を自分たちの祖先「姑婆（グーポ）」として迎え，これを傀儡戯を通して4日間にわたりまつることである。これは実質的には下房村の正月の村祭りである。担うのは梨園教という道教の一派の道士であり，かれらはまた傀儡師でもある。葉明生氏によると，こうした形の傀儡戯は福建省の北部を中心として，その周囲すなわち浙江省や江西省にもみられるという。道士が傀儡戯をするというのはあまり聞いたことがない。この傀儡戯の全貌に対する気掛かりは，2001年の2月にその始終を実見してある程度，解消された。それについては，稿を改めて述べることにする[5]。

9月1日

寿寧賓館から下房村まではタクシーで移動する。下房村の陳氏一族について，同行した葉明生氏は，次のように説明してくれた。宋の時代に陳洪軫という人がいた。かれは965年に科挙の試験に合格した。そして兵部侍部から礼部尚書になった。現代でいうと副総理格にまでなったということである。ところで陳洪軫の父はかつて，息子が科挙に合格したら自分の住まいを仏に寄進すると誓った。そのために陳洪軫は自分の家を寺とし，みずからは下房村に移った。その元の住まいは現在，三峰寺となって伝わっている。陳氏一族は，現在すでに33代，千年余りの歴史を持っている。また三峰寺は，現在，市政府が市民のための公園とするべく，さまざまな整備をしている。

下房村は五つの村から成り，現在479戸，人口は2120人。そのうち陳氏一族は1200人，半数を超える。特に，翁山，上房，大門では，ほとんどが陳姓の人たちで，実質的にはこの人たちが正月の祭儀を運営している。

さて，下房村の陳氏一族は，宋，元の時代に繁栄したが，明の嘉靖年間（1522-1566）に倭寇により殲滅されて，一時，村は壊滅状態に陥った。しかし，1646年，陳桂十とその子の陳国修が村に戻って，家を再興した。そして，その孫たちの力により，正月の傀儡戯の祭祀が復活した。ただし，下房村では現在，自分たちの傀儡は保存してあるものの，傀儡戯そのものはおこなうことができず，よその村の道士を招いてやっている。

下房村には陳氏一族の衆庁（宗族のさまざまな議題を話し合うところ）があったが，現在は取り壊され，別のところに祠廟として「衆聖宮」が建てられている（図版6）。ここが正月のまつりごとの舞台である。ここには陳靖姑（図版7）をはじめとし，華光大帝[6]（図版8），戯神の田公元帥（図版9）など，各種の神人形が56個も櫃のなかに大切に保管されている。

下房村では，93歳のおばあさん[7]に話を聞いた。このおばあさんは，幼いころの纏足の跡がみられた。ただし，労働をしなかったわけではない。7人兄弟の末っ子として生まれ，生後8カ月の時に結婚をさせられて，陳氏の家に送られた。聞いてみると，幼いときから，結婚の事実は知っていたが，実際に寝床を共にするのは，十五，六歳のころであった。子供は男の子2人，女の子1人で比較的少ない。夫は，42歳のとき，抗日戦のさなかに死去し，その後は女手ひとつで子供たちを育て，今なおさまざまな仕事をしている（図版10）。

ところで福建省では，このおばあさんのように，生まれて間もない子供あるいは幼い子

供を結婚の約束と同時に，男の家に送る習慣があった。これを童養婿（トンヤンシ）という。この背景には，女性が結婚するときに，多額の持参金を持っていく習慣がある。しかし，あいにく持参金が準備できない家では，幼いうちに男の家に送ってしまうのである。これと似た習慣はかつて朝鮮社会にもあった。朝鮮ではこれをミンミョヌリ（幼妻）とよんでいた。

また，下房村では，陳氏一族が所持している族譜「陳氏宗譜」をみることができた。宋の時代から伝わるものだとのことで，特に注目されるのは，女性の名前が比較的平等に書かれていることであった。例えば，下房村の陳氏一族の中興の祖ともいうべき陳洪軫のおいに陳小四なる人物がいたが，かれには「大婆呉氏」という正妻がいた。この正妻にはむすめがいて，おそらくはじめに生まれた子供なのであろう。これが第一番目に記されている（図版 11）。

李氏朝鮮初期の族譜にも言えることであるが，中世以前の女性の社会的地位は決して低くはなかったといえるのではなかろうか。ちなみに，中国中世史の研究者伊原弘氏は，「前近代すなわち徹底的な女性の抑圧の時代」とするのは少し検討を要するといい，例えば，女性の再婚が難しいとおもわれがちな中国であるが，案外再婚が多いのだという。また，士大夫のなかには母に学問を習ったという話が時々出てくるといい，なかには一家を差配した女性もいたようであるという。そして，宋の時代の都市蘇州を分析したなかで，街路の舗装工事の醵金名簿には女性の名前もあるという点に注目している[8]。これだけでなく，福建省においても家庭内における女性の実質的な地位は中国の北方に較べると，そう低くはなかったと主張する研究者もいる[9]。

とはいえ，解放以前の中国において，寿寧県の女性たちは離婚はタブー視されていた。実際，わたしたちが，下房村でいろいろな話を聞くときも，離婚経験のある女性は人前に出てこようとはしなかった。また遺産の相続などにおいてもあからさまに差別されていた。例えば，近い過去において，父親の死後，息子が 3 人，娘が 1 人いたとする。このばあい長男と二男は，財産の半分ずつを相続するが，長女や三男には何も与えられないのが普通であったと聞いた。婚姻においても，一家の長男が未婚の時は娘たちは結婚できない。もし結婚すると，その家の風水がなくなると考え，禁止するのだという。こうした慣行から考えると，族譜の記載例はともかく，近世以降の福建の女性たちの社会的地位はかなり低かったといわざるを得ない。その他，日常生活において守るべき制約は数多く，例えばごく近年までも，礼儀に厳しい家では，嫁が素足でスリッパを履くなどということを許さなかったという。

9月2日

今日はまず三峰寺にいく。文化大革命のときには石を作る工場にされていたが，現在は立派な建物となっている（図版12)。この敷地の奥に「宗伯紀念堂」があり，そのなかに下房村の陳氏一族の祖先陳洪軫が，舜帝の像とともに祀られている（図版13)。またこの建物の背後，小高いところには，大きな墓地があり（図版14)，そこに立って寺の入り口の方をながめると，その墓地の位置が風水にかなっていることが知られる。右に来龍を象徴した山並みがあり，左にもまた山が連なる。そして，南には水をたたえたところがあり，さらにその遠くには案山となる小山が見える。いわゆる「坐北朝南」の位置なのである。

三峰寺を出てから，寿寧県の陳靖姑信仰の中心といわれる臨水夫人廟にいく。それは後段村にあり，観音閣が管理している。観音閣には，観音のほか陳靖姑，華光大帝がまつられている。またそれに接して飛雲橋がある。明代の橋といわれ，屋根があり，橋全体が建物のような感じである（図版15)（図版16)。そしてこのなかにも陳靖姑がまつられている。こうした，家屋をおもわせる橋は寿寧県のあちこちにあり（図版17)，面白いのはその建物のなかに必ずいくつかの神がまつられていることである。

寿寧県ではさらに馬仙宮で馬仙という女神をみる。この女神は福建省北部ではかなり古くから信仰されていたようで，陳靖姑に勝るとも劣らないほどの人気がある。一般に，宋代以降，福建省では陳靖姑が人びとに篤く信仰されたために，各地の多くの女神がその部下となったが，この馬仙だけは部下にはならなかった。そうして，陳靖姑に隣接するところに小さな廟を構えてまつられているのが一般的である。これは寿寧県だけではなく，他の地域でもみることができた。

馬仙は，もと浙江の括蒼山景寧県の人で，唐の光老年間（898-901)，馬氏に嫁いだ後，夫に死なれたが，姑によく尽くし神仙を感動させた。そして，神仙の法を授けられ，人びとのために尽くしたといわれる。ただ残念ながら，これ以上の詳しい伝承は残されていない。祈嗣，祈雨の神で寿寧では6月16日を誕生日とする。

以上のほか田公元帥を主神としてまつった廟が注目される。田公元帥は，傀儡戯や芝居の守り神であるが，それだけではなく，地域の神としてもまつられる。その伝承にはさまざまなものがある。例えば，ある富裕な家の娘が，遊びに出かけたときに，果物があり拾って食べたら，子供を身ごもった。そして生んだ赤子を捨てたところ，蟹がいて，赤子を保護した。娘は3日後にこの赤子を探し当て，生きていたので，それを育てた。このため田公元帥の額には蟹の印が描かれる（図版18)。

また別の伝承では唐代の人とされる。彼は，音楽好きで，都にいって科挙の試験を受ける。すると第3位「探花」として合格する。その時，皇帝の娘が，遊びに来た。田公元帥はいつも寝てばかりいた。そこで皇帝の娘は田公元帥の顔にいたずらをしてカニを描いた。人びとはその顔をみて笑った。田公元帥は死んでから神になった。彼は人びとを笑わせる神なのだという。

またこんな伝承もある。田公元帥はやはり唐代の人，安禄山の反乱があった時，芸人であった。安禄山は劇団の者たちに演戯をさせた。しかし田公元帥は琵琶を弾くことを拒み，それにより安禄山に殺された。しかし，その後，玄宗皇帝はこの田公元帥の志に感動し神にしてあげた。以上のようなさまざまな伝承を伴う田公元帥は，浙江から中国の南部すなわち福建，広東，江西，台湾，さらに東南アジアにまで広がって信仰されている。このうち福建省の莆田市の民間では「願」という傀儡戯があるが，これは田公元帥の故事を演じるものである。

寿寧の路上では大道の易者がいて数人の人びとを集めている。そこには小さな男の子を連れた父親がいて，易者の判ずることばに耳を傾けている。寿寧のような地方都市でも至る所の廟が新たに建て直され，文化大革命でうち壊された神々の像も新しくなっている。これはまぎれもなく民間信仰の復興である。もちろん仏教寺院も改築あるいは増築をし，人びとの参拝の姿が目につく。

9月3日

寿寧県からうねりくねった山道を走ること7時間余り，福建省中部の古田県臨水宮にくる。この臨水宮は，福建省でも有名で各地にある臨水宮の中心とされている。正月15日の何日か前には，各地の臨水宮から進香に来た人びとで廟はにぎわう。特に13日は陳靖姑の誕生日とされ，この日から14日にかけてが人出のピークをなすという。普段はさほどのにぎわいでもないが，ただ，わたしたちがいった時にも，台湾からの参拝者たちが観光バスを連ねてきていた。彼らを率いていたのは男の童乩である。童乩とは神霊が身に降りた霊媒である。この童乩が，古田の臨水宮に参拝するべきだと告げると，村の人びとは集団をなして，ここまでやってきた。わたしたちは，この台湾からの進香団とは莆田の媽祖廟でも再会した。今日，台湾の人びとの故郷の神仏に対する熱い思い入れは特に注目に値する社会現象である。

古田の臨水宮の前には，参拝客のための宿泊施設がある。3階建てで，みたところ新し

そうな宿舎なので，ここに泊まることにした。ところが，部屋のなかの施設は木の寝台と扇風機があるだけであった。照明は薄暗く，浴室もかろうじて水が出るといったていどで，あまりほめられたものではない。聞くところによると，台湾のある篤志家が参拝客の便宜のために多額の寄付をし，その金で作られたものというが，おそらく寄付金の半分も使っていないのであろう，残りのカネは飲食に使われたらしい。この種の話は，また別のところでも聞いたが，それにしても，そうしたことを織り込み済みで，なお寄付をし，神々や故郷を訪ねる台湾の人びとの心持ちはどのようなものなのだろうか。わたしにはこちらの方がより興味深い。

9月4日

今日は臨水夫人廟をゆっくりと見学する。古雅な趣の入り口（図版19）[10]を通って廟のなかに入ると，ちょっとした空間があり，右奥に陳靖姑（図版20）がみえてくる。その左に李三娘，右に林九娘（以上が三奶夫人），さらに左右には陳靖姑の部下となった石夫人と江夫人がまつられている。これらはいずれも『奶娘伝』のなかで活躍する女神である。さて三奶夫人の下には陳靖姑が祟りなす白蛇と戦って，これを閉じ込めたという白蛇洞が模造されてある。この洞窟が下渡まで続いているということは先にも述べた。参拝者には伝説が目の前で再現されている感じであり，いかにも分かりやすい。

廟のなかで注目されるものはいくつかあった。ひとつは三奶夫人の向かい側に舞台があることで，そこでは正月などに奉納の音楽が演奏される。もうひとつは，各地の信者が臨水夫人に上げた寄付の額を記したものである。それはかなりの高額で例えば，福州の万寿堂の陳珠英という人は，1度に19300元もの，寄付をしている，これは日本円に換算するとおよそ25万円ほどにもなる。こうした額の寄付をおこなえるのはいったいどういう人であろうか。万寿堂という名前からみて，おそらく自分の神堂を構えている巫女のような人であろう。なお，それ以下の額面の人たちの名も少なからず壁に記されている。今日，神々に対する福建の人びとの信仰はとどまることを知らず，復活している。

臨水夫人廟では，2000年の今年，陳靖姑の生誕，1209年を祝う行事がおこなわれた。世紀の変り目という以外，あまりキリの良い年とはおもえないが，ともかく，これを機会にさまざまな寄付を募った模様である。

ちなみに，この臨水夫人廟の旧正月は，2001年のばあい，聞いていたほどの混雑はなかったが，それでも各地からトラックを連ねて，大勢の人がやってきていたのは確かだっ

た（図版21）。これについては稿を改めて説明する。

9月5日

臨水夫人廟の近くの村を歩いてみる。すぐ近くに，生命の花園ともいうべき「百花橋」があり（図版22），そこを渡ると，陳靖姑の生前，住んだというところに出る。そこは現在は廟として保存されているが，全体が新しくて古をしのばせるものはなかった。ところで，そのすぐ近くに，建ててから二百年ほどたつという，土塀の家があった。われわれは，そこに立ち寄りいろいろ話を聞くことができた。

この家を建てた人は女性で，さまざまな商いをして財産を作ったという。ひとつの敷地のなかに四世帯が入っている。現在この家の長老格のおばあさんは七代目の陳愛雪さん，76歳（図版23）。ひとりむすめであったため，25歳で婿を迎えた。結婚後，今日まで夫はずっと農業をしているが，愛雪さんは若いころも，そののちも農業の経験があまりない。とくに小さいときには，学校に通い，労働をしなかった。むかし，この村では学校に通う女の子は1人か2人であったという。

臨水宮とのかかわりを聞くと，村の女性のなかには，子供ができることを祈り，廟にある三十六宮の神像（子供を抱いた36体小さな女神像）のひとつを借りていく人もあったが，自分は借りなかった。しかし，結婚後，息子を授かるためにお参りはした。子供が生まれてから一ヶ月たつと，男女かかわりなく「過関」の儀礼をやる人がいた。そして，これは16歳になるともう1度やった。ただ，陳さんの家ではやらなかった。

正月は臨水夫人の誕生日ということで，よく参拝もし，また廟の前には，かつては地方劇団がやってきて芝居をしていたので，それは楽しみであった。近ごろは，劇団もなく，あまり参拝にもいかない。不幸にして，生まれたばかりの赤ん坊が死んでしまうと，葬礼も何もしないで土葬した。そして祟りのないようにと，臨水宮にいって，将軍の札をもらってきたものだ。陳さんはこう話をしてくれた。

9月6日

古田から福州へ戻る。福州では，再度，東湖賓館に宿泊。明日から莆田地区にでかけるので，その打ち合わせをする。莆田でまず問題になるのはことばの違いである。福州のことばとも違い，同じ福建省の人でも通訳が必要である。わたしたちは，馬建華氏の弟に連

絡を取り通訳を依頼する。彼は中国で大学を終えてから，日本で，二，三年，勉強をしたという。目下，職探し中で家にいるところであった。福建から日本に勉強に行く若い人はこのごろは多いというが，こうした人をいざみつけるとなると，なかなか難しい。今回は前もって特に探したわけではなかったのに実にさいわいであった。

9月7日

福州から莆田までは，高速道路があり，バスはかなり迅速に走り，2時間ほどで到着した。今，福建省は海岸部ならほとんど問題なく高速で移動ができる。中国の海岸部が，今日，経済発展を遂げているということはよく聞いている。福建には台湾の資本が投入され，都市近郊の農村は小規模な工場地帯と化していく。高速道路沿いにみる，その光景は1970年代に韓国の南部馬山などでみた光景とよく似ている。莆田市は今日，百万人の都市である。

莆田では，まず江口の東嶽廟にいく。東嶽廟は東嶽大帝をまつり，一般に死者の儀礼をおこなうところである。宋代に普及し今日に及んでいる。ここの東嶽廟は，由緒が古く宋代に建てられ明代に改築された。莆田では有名で，死者の弔いはいうまでもなく，それ以外の願い事を持って，やってくる人たちも多い。われわれのいった時も，50代の女性がいて，恭しく拝礼をしていた（図版24）。話を聞くと，韓国にいって仕事をしている息子のために，今日は，1600元ほどの費用で地方劇団を雇い，廟のなかの舞台で芝居を奉納しているという。なるほど，昼間から，にぎやかな音楽がきこえる。いってみると，数十人の観客を前に芝居をやっている（図版25）。こうした光景は莆田ではごく一般的なことらしく，あちこちの廟で芝居をおこなう地方劇団の数は，100以上になるのだという。なお東嶽廟や媽祖廟は，中世以降，商人の支持を得て，派手な祭礼をおこなう傾向があったといわれている[11]。

東嶽廟の見学を終えてから，わたしたちは，たまたまそこにきていた道士に案内されて，少し離れた江口鎮厚峯村の寺を見学した。そこでは，古くなった寺を大改築して，今日は本殿の落成式をしていた。本殿中央には，真新しい黄金の仏像があり，人びとがお祝いに集まり，食事の支度をし，音楽を奏でていた（図版26）。かれらは近くに住む男女である。陣頭指揮するのは割腹のいい弁のよく立つ僧侶であった。この僧侶によると，海外華僑から120万元（1700万円ほど）の寄付金があり，それで本殿は立派にできあがった。もっともすべて完成させるには，あとまだ180万元ほど必要であるともいう。そして，さなが

らマネージャーのように精力的な件の僧侶は，今日はシンガポールからお客が団体でやってくるのでといって，昼食後，あわただしく町までクルマで出迎えにいった。今日，福建では，華僑を輩出した地域の至る所でこのような寺廟の復活があるという。

わたしたちは，この後，夕刻，莆田市に戻って，田公元帥の廟「瑞雲祖廟」に立ち寄った。福建にある数多くの戯神廟のなかでももっとも特色のある廟といわれる。この地はまた莆田市城廂区拱辰村の頭亭（現在の地名は北門）にあり，そこは福州と廈門をつなぐ道路に接していて，かつて芸能者たちが多く集まった[12]。

田公元帥は戯曲の神とされるが，福建省の各地で，地域の守護神としてまつられている。瑞雲祖廟は明初に建立されたといい[13]，およそ六百年の歴史を持つ。その祭儀は4月9日と8月23日で現在でもこの日におこなわれている。さて，この廟のなかで注目すべきものは，癩公（ルゴン），癩媽（ルーマ）とよばれる二体の神である。これは，かつて，子供の天然痘を防ぐ神として，また，子供の誕生を促す神として人びとに厚く崇拝された。現在もなお，子供を祈る女性たちがお参りにくるという。なるほど，この神の前の卓上には，奉納された靴や香水などがみられる。香水については，病気の子供の顔にこれをつけると治るという。靴は子供を祈って，願い通りに子供が産まれたときに，お礼の印に持ってきたものである。すなわち，この一対の神は陳靖姑と同じ働きをする神なのである[14]（図版27）。

9月8日

湄州島の媽祖廟にいく。湄州島までの道は，かつては舗装もされない細い道であったというが，最近は内外の観光団も頻繁にいくことから，市政府が立派な舗装道路を作った。湄州島の媽祖廟そのものもまた，数年前とはすっかり様変わりしたという。いたるところに，台湾の人びとの寄付で作られた建物があり，そしてそのなかには立派な新しい神々の像がみえる。媽祖廟を参拝したところ，3日前に莆田で会った台湾の進香団と再会した。また媽祖廟には地元の女性たちも頻繁にお参りにいく。

わたしたちがいった時，地元の婦人とそのむすめが参拝にきていた。普段着のままではあったが，その祈りの表情は真に迫るものがあった（図版28）。わたしはこの人たちに参拝の理由を聞いてみた。ふたりはすぐ近くの村からきていたので，とりあえずその村までいっしょに戻った。その村は高朱村という。

この村では媽祖に参拝にいくのは，男の子を望んで，また魚を取るのに必要だからということであった。参拝にきていたそのむすめにはまだ子供がいないようであった。そこで，

経験豊かな母親の方にかつてのことを含めて媽祖にまつわるさまざまな話を聞いてみた。名前は教えてくれなかったが，年は58とのことであった。話の途中から年輩の男性も加わって船上での媽祖のことなども教えられた。

媽祖のまつりは正月の十日から十四日までの三日間が最もにぎわう。この間は，神輿に媽祖を乗せて，島のなかを巡り歩く。媽祖の神輿は，個人の家に入っていき，そこで迎えられることもある。この神輿を担ぐのは，高朱村と東蔡村の人たちだけである。そこはそれぞれ媽祖と媽祖の妹の住んだ村だという。人びとは海に仕事にいくとき，もちろん媽祖を拝んでからいく。中には毎日，媽祖廟にいって，仕事の安全を祈願する人もいる，船上でも，また媽祖をまつる。そのばあい，朝と夜の二回，線香を焚き，米と餅を供え爆竹を鳴らす。遠方から来た船もここの媽祖廟のそばに船を止めて，祈っていくという。ただ面白いことに湄州島では，船の上に女性が乗ることを特に拒まない[15]。ただし，船の先の方から乗ることはいけない。近年では，特に忙しいときには，男女ともに船に乗って仕事をしているという。

湄州島ではかつて王爺の船を流していた。王爺船とともに悪いものを流すという信仰が確かにあり，かつては，木の船を造って流したものだが，近年はやらない。海上あるいは海岸に死体が漂ってきたときは，これを拾って必ず埋めてあげる。そうすると，福がやってくるという。この信仰は台湾でも広くみられる。

子供を祈って生まれたときには，一カ月目にお礼参りをする。この時，女性たちは，卵を赤くしたもの（紅蛋），麦粉で作った饅頭（紅亀），果物などを持っていく。さらに最近はやらなくなったが，満一歳のときにも，媽祖廟に感謝のお祈りをささげた。その他，結婚の時にも感謝のお礼参りをした。結婚は，男は余裕があれば十五，六歳，余裕がなければ二十過ぎであった。女性は，十五，六歳から十七，八までの間に結婚するのが普通である。結婚式の費用はほとんどが男の負担である。

この地域は漁村であり，男たちは魚を取りに，台湾近くまで帆掛け船で出かけていった。女性たちは網を作り，麻の布を織り，家庭の仕事，育児をになった。海岸では昆布や海苔を採取したが，農業は麦や豆，サツマイモなどをわずかばかり作るだけであった。近年は，台湾の人たちがきて地域の政府と話をつけ，土地をだいぶ買い占めたため，わずかにあった農地もなくなったという。

湄州島出身の華僑はあまりいないが，国民党の時代に台湾に連れていかれ，あとで成功した人が何人かいて，ときどき戻ってくるという。現在，湄州島は十一の自然村落からなり，およそ四万人ほどが住んでいる。かつては村の各地に巫女がいて，人びとの個人的な

相談ごとに応じていたというが，今はほとんどいない。

9月9日

莆田市城廂区城南郷小厝村で傀儡戯をみる。この傀儡戯は，小厝村の，ある一家が5歳になる息子の健康と今後の成長を祈願して奉納するものである（図版29）。莆田の近辺では，こうした個々の家による芸能の奉納が盛んで，傀儡戯ではなく芝居を奉納することもある。傀儡戯は小厝村の廟の前の常設の舞台でおこなわれた。この廟には3体の神がまつられている。中央は，法主仙妃（李三夫人），これは三奶夫人の一人李三娘で，このように李三娘だけをまつることも各地でみられる。この日の費用は，およそ二，三百元である。行事は昼過ぎから始まり，夜10時ごろまでおこなわれた。個人の家の祝事ではあるが，村の人たちは舞台の前にも集まり，また食事の時には当たり前のように振る舞いにあずかっていく。人びとのこうした参加はこの家の祝いごとの雰囲気を盛り上げる。これはいかにもムラ共同体の雰囲気である。

演目は大衆劇で『白桂林』という（図版30）。その内容は次のようなものである。皇太子の誕生日の宴がおこなわれている，そこに，皇太后の縁戚の女性とその娘蘭春がよばれてやってくる。その時，皇太子は，美しい娘蘭春を見初める。蘭春は白桂林の妹である。皇太子は蘭春を宮中によぶ。よばれた蘭春は宮中にいくべきかどうか悩む。その時兄の白桂林が妹の代わりに女装をして，宮中に上る。

さて宮中に上った白桂林は，皇太子の妹，公主と出会い仲良くなる。公主は「蘭春」が実は男であることを知る。2人は，やがて，恋仲となり，公主が白桂林の子をみごもる。公主は身ごもったことを，父母に対して隠すために病気と称して，山に修行にいく。ところが，山にいったとき，公主は知府に会う。この知府は皇帝のところにいく途中であった。知府夫婦は，公主とそのお付きの女を観察し，やがて懐妊していることを知る。そして，知府は皇帝のところにいき，公主が実は子供をみごもっているということを告げる。しかし，皇帝は初めは，そんなはずはないと知府を退ける。

その後，公主は赤ん坊を出産する。そして策を巡らし，この赤ん坊を蘭春と皇太子の間の子供として蘭春に引き取らせることにした。だが，やがて，生まれた子を抱いた蘭春が皇帝の前にやってくる。その時，知府は，赤ん坊を抱かせることで，実の親がだれであるかを明らかにさせる。蘭春の抱いた子供は泣くが，公主が抱いたときは泣かない。このため，その赤子が公主の子供であることがわかる。しかし，皇帝は，白桂林と公主の誤りを

許してあげる。こうして，赤ん坊は，白桂林と公主の下に引きとられ，大団円を迎える。皇太子と蘭春も無事結ばれる。

以上の人形を用いた演劇は，およそ2時間半ほどおこなわれた。女装した美男子と公主の恋愛などは絵空事のようなものだ。だが，観る人びとにとって，それが絵空事であったとしても，生まれ落ちた子供をめぐってのやりとりのあと，結局，実の父母のもとにおさまって大団円となるのは，やはりひとつの安心の過程だったのだろう。

このあと，村の人びとととともに，夕食をとる。さらに夜は，もう二番，傀儡戯がかかった。いずれも，家の繁栄と子供の成長を祝福する内容のものである。注目されるのはこうした傀儡戯がすべて終わったあと，村の廟のなかに傀儡師が入り，人形を操って最後の儀礼をしたことである。本来ならば傀儡師は廟の外のあそびだけを担うはずであるが，文化大革命以後，廟のなかの儀礼をおこなう道士や法師は数が少なくなり，この付近では，傀儡師が神ごとを同時にになうことが多いという。この日の傀儡師も自己流で勉強をしたといっていたが，廟内の諸々の神に対して感謝の唱えごとをし，さらに傀儡戯の場に集まってきた鬼神たちに儀礼の終わりを告げて，速やかに立ち去るようにと唱えごとをした（図版31)。すべての儀礼が終わったのは，およそ10時ごろであった。

この日，特におもしろくおもったのは村の廟が村祭りの時だけでなく，個々の家の祝いごとなどにも有効に活用されているということである。そしてまた，昼間は忙しく仕事をしていた村人たちが夕食後にはたくさん集まり，みずからも楽しみ，そのことで，ともに祝いごとをしてあげるという共同体独特の雰囲気がみられたことであった。同じことは三日後，北斗戯をみたときにも体験した。

中国では今，かつての共同体の祭祀と芸能が目覚ましい勢いで復活している。しかも，舞台の上での演劇だけではなく，廟のなかの儀礼もまた同時に復活している。おそらく，廟の外のあそびは廟のなかでの儀礼をおこなってはじめて完結するということを，人びとは感じ取っているのであろう。そして，その人びとの要求に素早く反応するのは，傀儡師たちの，あるいは芸能者たちの伝統なのである。

この日のような，家庭の祝福の傀儡戯は散戯という。

9月10日

莆田市から車で1時間ほどのところ莆田県忠門鎮坂尾村に老傀儡師の許阿発翁を訪ねる。許阿発さんは，72歳。祖父の代から傀儡戯をしている（図版32)。普段は農業。許阿発さ

んによれば，よくやる傀儡戯には，北斗戯，目連戯，散戯，願，瘧戯などがあるという。まずその内容から話を聞いた。

北斗戯は子供が生まれるように，また生まれた後1カ月，あるいは4カ月目や1年目におこなうことが多い。特に多いのは1年目である。また病気の時に早く良くなるようにと願をかけ，その願いがかなったときにもよくやる。目連戯は宋代このかたさまざまに脚色されてきたが，根本は目連導者が堕地獄の母を救済する宗教的なあそびである。ここでは，死者の霊魂を弔うためにやるもので，われわれが訪ねたときにも，近々，あるおばあさんの霊魂を招くためにやる予定があるといった。願は，さまざまな願い事が実現した後に，そのお礼のためにおこなうもので，還願の省略形である。これは田公元帥の故事を演じるものである。また瘧戯は，陳靖姑の故事を演じることで天然痘の被害を避けるもので，かつてはよくやった。しかし現今はこの病気がなくなったため瘧戯そのものもなくなった。また散戯は家の祝福，特に商売繁盛のためにおこなわれるという。そういえば，昨日のばあいも，依頼者の若い夫婦は市内で小さな印刷関係の仕事を営んでいた。つまり，子供の成長を祈願すると同時に，家業の繁盛も祈っていたのである。

許阿発さんは，14歳から木偶戯を習い始め，二，三年後には，一人前にできるようになった。ただ，かつても今も，木偶戯だけで生活することは難しく，生活は農業が主である。これは他の傀儡師のばあいも同様で，この近辺では，木偶戯だけで生活している人はいないという。木偶戯は主に10月から1月にかけての，三，四カ月が忙しい。ひとつの班は七，八名で，これ以下では傀儡戯は不可能である。以前はひと月に，15回前後，演じたこともあるというが，最近は若い人を中心にした劇団に押されて，あまり依頼がない。

傀儡師は普通，家のなかに戯神をまつっている。許阿発さんは田公元帥ではなく楊公太子を戯神としていた（図版33）。毎晩，線香をあげて拝む。また，傀儡戯をしにいくときは，この将軍神を携えていく。そして芝居をはじめる前に舞台の袖で戯神をまつる。これはすべての傀儡師が同様におこなう。許阿発さんは解放後，1964年ごろまでは木偶劇をやっていた。しかし，64年から79年まではできなかった。

わたしたちは昼食後まもない時間に訪ねたのだが，許阿発さんは，時間には関係なく，その訪問をこころから喜んでビールをはじめ，さまざまな食べ物を用意して待っていてくれた。とても食べられない量であった。それは，どこの農村にもいる，人の好い老人という感じで，芸能者の面影はあまりなかった。

9月11日

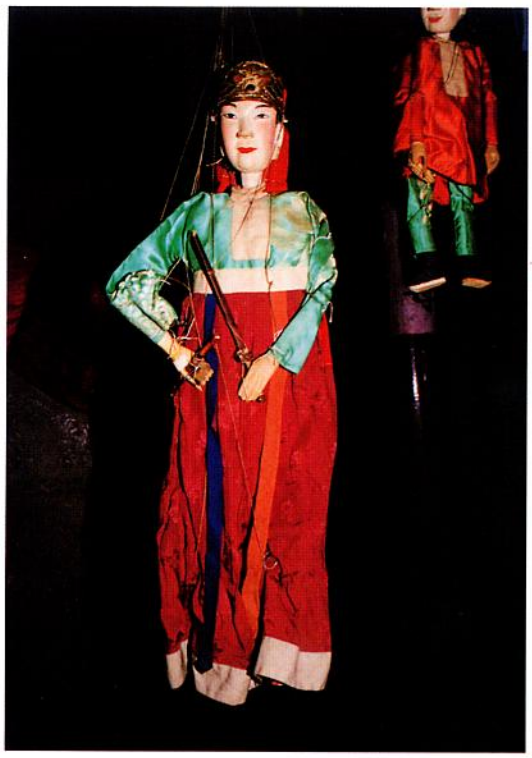
今日は莆田市城廂区の龍橋村へいって，三教の道士たちがおこなう儀礼をみる。龍橋村では新しく大聖廟を作り直して，その落成式をおこなった。大聖廟は，もともと道路沿いにあったが，道路の拡張のために現在のところに移転され，この日は同時に「老年人娯楽中心（センター）」の落成記念がおこなわれた。いってみると莆田市江口歌劇団がきて，大衆芝居をやっていた。夕方5時からは，廟の神像の安座の儀がおこなわれた。

三教は，明の嘉靖年間に儒教，道教，釈教の三教がひとつになってできた一種の民俗宗教である。葉明生氏によると福建省では，北部，中部，南部に比較的多く，東部や西部には少ないという。これは現在，台湾や東南アジアにも分布していて，民間信仰に大きな影響を及ぼしている。三教の担い手は，かつて，科挙の試験に落第した知識人たちで，かれらが担い手となったことから，民間では一般に「先生」とよばれて，相応の尊敬を受けてきた。城廂区の，この近辺では伝統的に三教が信仰されていて，この日の，安座の儀にもかれらがよばれたのだという。ちなみに三教の祖師林兆恩をまつる三教祠は城廂区東陽山にある。

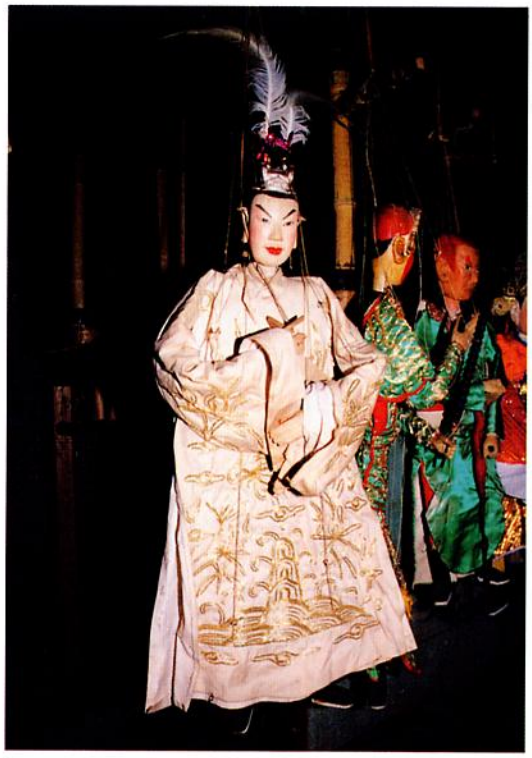
夕刻6時少し前，9人の道士たちが庭に勢ぞろいした。科儀書に従って唱えごとを唱え，やがて音楽を奏でつつ，庭を複雑に練り歩いた（図版34）。この練り歩きは，およそ1時間おこなわれた。葉明生氏によると，その歩き方は，まず五方を踏み固め，次に，九宮八卦壇あるいは九品蓮花舞を象徴したものだという。つまり，道教と仏教を取り混ぜた歩行の儀である。

夜は比較的時間があったので，ここまでの，およそ2週間に見聞した福建省の暮らしぶりと明日みる予定の北斗戯について話し合いをする。中国の海岸部の経済の進展ぶりはめざましいものがある。いたるところで携帯電話が普及し，小さな会社，商店でもコンピューターを利用している。広東の広州では中古のパソコンがかなり安く売られていて，これを買ってきて売る商人がけっこういるらしい。もっともパソコンそのものではもうからず，周辺器具で利益を出すというから，日本などと同じことが起きている。若い世代はこうしたものの流行に敏感で最新の情報もかなりよく知っている。

しかし，多くの知識人が認めているとおり，八億の農民は仕事を求めており，しかも，彼らの声は容易に上に通じない。基礎教育の普及，充実は，かれらにとっては，まだまだはるかに遠い話であり，一方，日増しに物価は上がっていく。都市では，簡単な昼食も，10元前後，麺のたぐいも3元から5元はする。タクシーは，7，8元が基本料金であ



図版 7　衆聖宮に伝存する陳靖姑。



図版 9　衆聖宮に伝存する田公元帥。梨園教の教主でもある。正月の傀儡戯の最後には必ず戯神田公元帥による「田公掃台」という祓いの儀礼がおこなわれる。

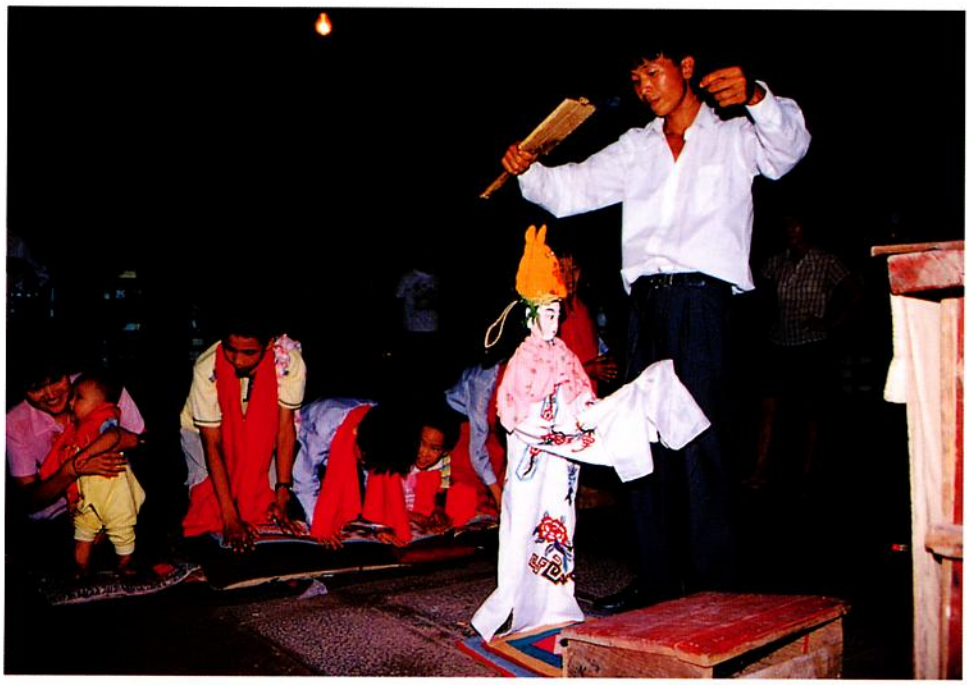
図版19　古田県臨水祖廟。額には「収賜臨水宮」と記されている。

図版21　2001年旧正月13日の臨水祖廟のにぎわい。各地からやってきた進香団が次つぎと拝礼をしていく。この時，先導してきた道士あるいは法師の儀礼が伴う。

図版27　莆田市城廂区拱辰村頭亭（北門）の瑞雲祖廟内にある瘧公（中央右），瘧媽（中央左）。その前に靴がみえる。これは子供を授かった女性たちがお礼に奉納したもの。

図版35　北斗七星の化身とされる高夫人（右）が林九娘に皇后懐妊のための策を授ける。

図版36　土地公（左）は皇太子（中）が生まれることを甥っ子（右）に語って予祝する。この後皇太后は，実際に懐妊して，太子を生む。



図版39　舞台の演戯がすべて終わった後，傀儡師は，信徒を代表する人形を伴って廟の中に入り，地域の神に演戯の終了を感謝する。依頼者たちもともに拝礼。左端には次男である赤ん坊と母親がみえる。

り，床屋などでも10元前後はする。靴やカバンも，10元から20元，図書も，学術書ともなればかつては1元であったものが現今では10元から30元ほどの値がついている。

一方，もろもろの職業の月の給与を聞いてみると，会社員で千元前後，小中学の教員は，千元未満も多いという。こうしたなかで，コンピューターなどは，安くなったとはいえ，一万元前後もする。これが都市ではかなり普及しているというのは，すなわち富の偏在を意味している。福州市や莆田市の中心部では自営業の人たちの享楽の場が少なくないのに驚かされる。またマンションのたぐいの不動産は，一戸当たり五十万元以上もするというが，ここに入居を希望する人たちの数も少なくはないという。

1990年の初春，北京で5ヶ月，そののち雲南はじめ各地を1カ月ほど旅行したことがあるが，そのときと較べると，この10年の間の自動車とオートバイの普及はめざましい。ホンダのオートバイは15000元以上というが，これを乗り回す若者もかなりいる。通訳の馬さんは30代はじめであるが，かれも中古のオートバイを持っているという。それはそれでごく当たり前の現象である。ただ，その馬さんが，中国のさまざまな課題のうち，教育の普及は最も深刻な問題のひとつだと真顔でいったのは古くて新しい苦悩だとおもわれた。かれの父親は小学校の校長だったらしい。年のかなり違う兄の建華さんは文革のとき，農村に下放され，苦労した。わたしが，中国全体の基礎教育の先行きをたずねると，馬さんは言葉少なに日本語で「難しい」とだけいった。

9月12日

今日は旧暦の8月15日，それかあらぬか，この日を選んで北斗戯がおこなわれた。場所は仙游地区の東汾で，現在の地名は莆田市北岸区霊川鎮。ここのある一家が，生まれて間もないす男の子の病気の快癒を祝っておこなうことにした。

北斗戯の担い手の詹建洪さんは，1968年生まれ，今年まだ32歳である。代々，木偶戯をおこなう家に生まれて，現在4代目である。11歳のころから木偶劇をやり15歳で一人前となったという。かれこれ20年の経歴がある。ただし，前に許阿発さんが言ったとおり，木偶戯だけで生活することは難しく，日ごろは農業を営み，豚の飼育などをしている。

この日の依頼者は，かねがね，詹建洪さんに北斗戯を依頼していたが，費用が整えられず，延び延びになり，年末にでもやることにしていた。そこで，詹建洪さんは，いろいろ考えた末に8月15日がよい日だということで，割安の費用で引き受けることにした。このように決定した背景には，わたしのような外部の者の参観ということも作用していただ

ろう。

さて，依頼者のほうにどういう事情があったのか。それをきくと，この地区で北斗戯がおこなわれる背景がよくわかる[16]。すなわちその家では，現在，男の子が2人いる。7歳になる長男は生まれたときから足が不自由で，ひとりでは歩けない。こうしたばあい，中国政府は，2番目の子供の出産を許可する。そして，今年の初め，待望の2番目の男の子が生まれたが，生まれてすぐ病気になり成長が危ぶまれた。ところが，村の廟に祈願をしたところ，病は順調に回復した。現在，その赤ん坊は7カ月であるが，健康である（後掲の図版39参照）。これを感謝し，併せて今後の生長を祈願して北斗戯をしようというのである。ただし，家の主人は北京にいって仕事をしている。そして収入もはかばかしくなく，300元ほどの費用[17]がなかなか用意できないのが実情のようであった。

この日の北斗戯は五帝祖廟でおこなわれた。この廟は非常に大きい敷地を占める。廟前に石碑があり，それによると，唐代に建てられ，明代に現在のところに移された。ここには常設の舞台がないので，詹さんたちは，昼過ぎから，やぐらを組んで舞台を作った。午後3時近くになると，舞台の設えがほぼ整い爆竹が鳴らされる。これ以降，夕食をはさんで夜遅くまで北斗戯をはじめ，いくつかの傀儡戯が奉納される。

北斗戯は次のような物語を人形を使って演じるものである。すなわち，宋の初代皇帝（あるいは真宗）には跡継ぎがなかった。そこで皇帝は張仙という名の道士をよんで，天帝に対して子供を授けてくれるように祈れと命令する。張仙は皇帝の命を受けて黄籙醮をはじめる。やがて赤脚大仙[18]と林九娘，黄巷大将は天上にのぼる。ところが天上では，天河聖母とその部下が青草（あるいは花果）を守っていて，これを渡さないようにする。

林九娘と黄巷大将は青草を手に入れることができず，戻ってくるが，この時，高夫人が現れて，2人に策を授ける（図版35）。高夫人は北斗七星の化身である。その策をもって，林九娘らは，再び天河聖母と戦い，ついに青草を手に入れ，これを皇帝の妃に献上する。やがて，太后は懐妊する。ところが，天河聖母は，今度は　出産を妨げようとする。

その時，現れるのが古田の陳靖姑である。陳靖姑は刀を携えて意気揚々と現れ，天河聖母と戦いをくり広げる。そしてついに，天河聖母を制圧する。陳靖姑は太后の懐妊を助けるべく法事をする[19]。また土地公が現われて，懐妊を促進する（図版36）。このおかげで太后は皇太子を出産することができる。ところが，生まれた皇太子は病に侵される。これはもちろん天河聖母が部下を使って引き起こしたものである。すなわち天河聖母の部下に五路童子がいる。これが幼児の成長を妨げる。

一方，南斗宮に住み南斗星君ともよばれる衛房女神が現れる[20]。この星君は人間の生命

を司るので傀儡師らは衛房女神として登場させた。陳靖姑と衛房女神の活躍により，幼い皇太子は無事に成長し，宋の第2代皇帝になる（図版37）。観る者にとって子供の無事な生長ということが印象深く残る。それは皇太子であってもなくてもかまわない。

物語はここで一段落するが，北斗戯はこれで終わらない。過関の儀がなお，ある。過関では，陳靖姑や衛房女神だけではなく，現実の子供たちも舞台に現われ，巡り歩く（図版38）。舞台には百花橋が準備される。百花橋にはとりどりの花が咲き，その花が子供として，人間の世界に送り出される。この百花橋を通過すれば，子供の身に生じたさまざまな災いが取り除かれる。そうして，今後の健やかな成長も期待されるのである。

今回は，依頼者の家の二人の男の子が親戚の者とともに舞台を巡った。そうして，幾度か巡ったあとで，舞台の袖から，花を象徴した小枝が舞台下に向けてまかれた。これは分花という。この花を手に入れれば，人びとは新しい生命を授かる[21]。こうした事例は今日，台湾でもみられ，そこでは栽花とよんでいる[22]。名前は違うが，花を女性に授けることにより，新しい生命が授かるとする観念は同じである。

分花が終ると，詹建洪さんは，信徒を代表する人形を持って廟のなかにいく。このとき依頼者の側の若い母親や子供たちもついていく。そして地域の神へ北斗戯が無事済んだことを感謝して皆が恭しく拝する（図版39）。

北斗戯は昼過ぎから夕食の前までおこなわれ，この後，夕食をはさんで，さらに大衆劇が木偶によって演じられた。今日の行事は午後2時ごろから始まり，夜は11時近くまでおこなわれ，最後の2時間は，広い廟の前の空間が人びとでいっぱいになった（図版40）。ある一家のささやかな奉納芸能であったが，その集まった人びとの熱気はさながら村祭りのようであった。この光景の核心にあるのは，生後間もない子供に注ぐ若い母親の慈しみと，それをともに喜んでやまない隣近所の母親たちの祝福のまなざしであろう。こうした集まりは，文革の期間はあり得なかったであろうが，ここ仙游でも，共同体に伝わっていた伝統的な祭祀と芸能は確実に復活していた。

今回，わたしは短い期間ではあったが，福建省の各地で目ざましく復活する芸能空間を目の当たりにすることができた。この，ある種の熱気がいつまでもつづくとはおもえないのだが，どのような形で収斂されていくのかは予測がつかない。ちなみに，この種の芸能空間の盛り上がりはかつて，80年代初期の韓国においてもみることができた。そしてその韓国の熱気は，つづく十数年の間の，余りにも速い近代化，都市化の広がりとともに失せていった。中国のばあいはどのような展開をみせるのであろうか。5歳の息子を抱いた若い母親の笑顔が脈絡もなく浮かんできたりする。やはり気がかりである。

注

1) この方面についてのわたしの問題意識は「東シナ海周辺の女神信仰という視点」『日吉紀要 言語・文化・コミュニケーション』No.26，慶應義塾大学日吉紀要刊行委員会，2001年，1-31頁において述べた。

2) こうしたなかで前引『日吉紀要 言語・文化・コミュニケーション』No.26に掲載された葉明生氏の論文「福建の女神と人形劇――陳靖姑の信仰と傀儡戯『奶娘伝』」は，非常に注目される論文である。

3) 2001年に，福州に再度いった時の話では，市政府は近々ここを再開発し，陳靖姑の祀りどころもなくなる予定だという。このようなものは文化局にとってはおよそ何の意味もないのであろう。

4) 田仲一成「南宋時代の福建地方劇について」日本中国学会報，第二十二集，1980年，105頁。

5) なおこの祭祀の概要，物語の全体については，葉明生氏が，すでに台湾のほうで発表している。呉乃宇記述，葉明生校訂『福建寿寧四平傀儡戯奶娘伝』（民俗曲芸叢書），財団法人施合鄭民俗文化基金会，1997年参照。

6) これは陳靖姑に匹敵する神で，下房村では1年ごとに，正月儀礼の中心の神として傀儡戯を奉納する。

7) なおこのおばあさんは，村では「阿県婆（アシェンポ）」とよばれている。これは，阿県（県の中心地域）で生まれた人という意味である。例えばまた，東京で生まれた人ならば「東京婆」という。この種の呼び方はかつての朝鮮の農村にもあった。

8) 伊原弘『中国中世都市紀行』，中央公論社，1988年，78，77頁参照。

9) 徐暁望『福建民間信源流』では，古代の福建女性には一定の財産権があったこと，すなわち持参金に当たるモノをたくさん持っていく厚嫁の風の背景に女性の財産権が認められること，女性に財産相続の権利があったことが指摘されている。また，夫婦を中心とした単婚家族が主となっていてそこでは女性の裁量が発揮されたことなども例示されている（徐暁望『福建民間信源流』，福建教育出版社，1993年，261-264頁参照）。

10) 葉明生氏によると，8世紀の末に創建され19世紀末に重建された。前引，葉明生「福建の女神と人形劇――陳靖姑の信仰と傀儡戯『奶娘伝』」掲載の図版1とその写真説明参照。

11) 前引，田仲一成「南宋時代の福建地方劇について」，111頁参照。

12) 楊榕「莆田市瑞雲祖廟之田公元帥信仰，祭儀與戯劇」『民俗曲藝』第122，123期，財団法人施合鄭民俗文化基金会，2000年，7，8頁。

13) 前引，楊榕「莆田市瑞雲祖廟之田公元帥信仰，祭儀與戯劇」，16頁。

14) なお台湾台南市の臨水夫人廟では花公花婆という神がまつられている。同じく女性に花すなわち新しい生命をさずける。この神については，拙稿「台湾人の儀礼と「物語」（二）」『日吉紀要 言語・文化・コミュニケーション』No.25，慶應義塾大学日吉紀要刊行委員会，カラー図版49，51を参照のこと。

15) これがどのくらい昔からの慣習なのか，人民中国になってからの新しいかたちなのか，確かめるすべはなかった。もし古いしきたりであるとすれば，一般に，船上では女性が忌避されるという，東アジア的な観念には修正が必要となるだろう。ともかく，このことがよりによって，媽祖の故郷で伝えられているということは興味深い。ちなみに『莆田県志』には，「田野婦女皆能

躬耕，深山婦女皆能樵采，沿海婦女皆能捕魚」とある（徐曉望教示）。女の木こり，漁(すなど)りは古くからあったのだろう。

16） 北斗戯は莆田と仙游の地区に特有のあそびのようである。たとえば，先に訪問した湄州島などでは，この名前を聞いたことすらないとのことであった。

17） これは，傀儡師たちへの報酬である。本来は，このほかに，祭儀の専門家としての，師公をひとりよばなければならない。その費用はおよそ100元である。だが，近年は師公をよばないことが多い。

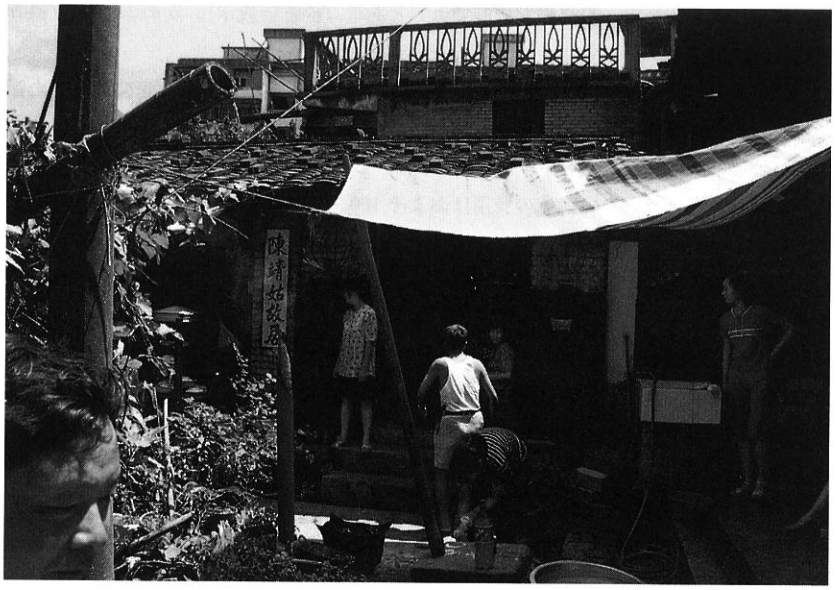
18） 莆田では八仙のひとつとして信望を集める。劉海蟾のことで，ここでは太后を懐妊させる役割を果たす。

19） 拙稿「東シナ海周辺の女神信仰という視点」『日吉紀要　言語・文化・コミュニケーション』No.26，慶應義塾大学日吉紀要刊行委員会，2001年，図版2参照。

20） この女神と五路童子については，前引，拙稿「東シナ海周辺の女神信仰という視点」，カラー図版1参照。

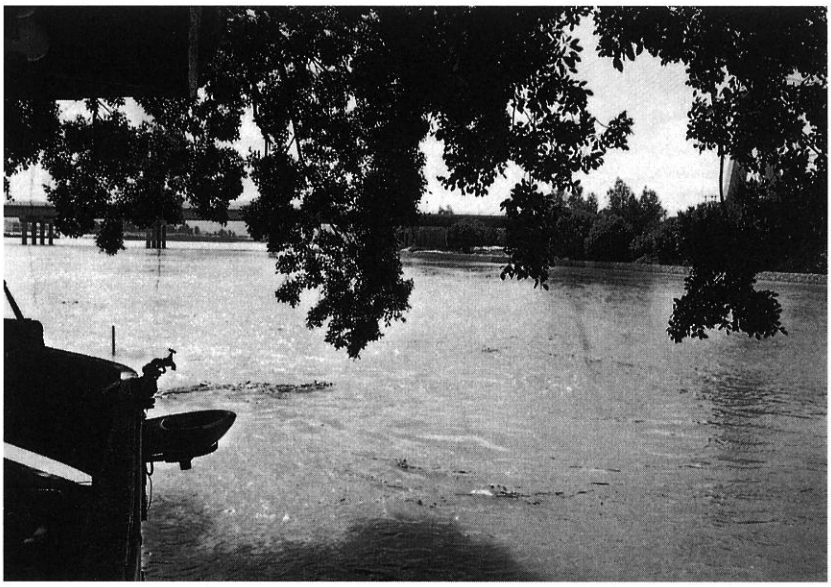
21） このときの「過橋」の図版は，前引，拙稿「東シナ海周辺の女神信仰という視点」の図版7，8をも参照。また前引，葉明生「福建の女神と人形劇――陳靖姑の信仰と傀儡戯『奶娘伝』」にも過橋の説明がある（64-68頁）。福建では過橋は広くさまざまなかたちでおこなわれるが，これは東アジアに共通する霊魂観の上にある。

22） 台湾の栽花の象徴的な図版は，拙稿「台湾人の儀礼と「物語」(二)」『日吉紀要　言語・文化・コミュニケーション』No.25，慶應義塾大学日吉紀要刊行委員会，2000年，カラー図版63を参照。

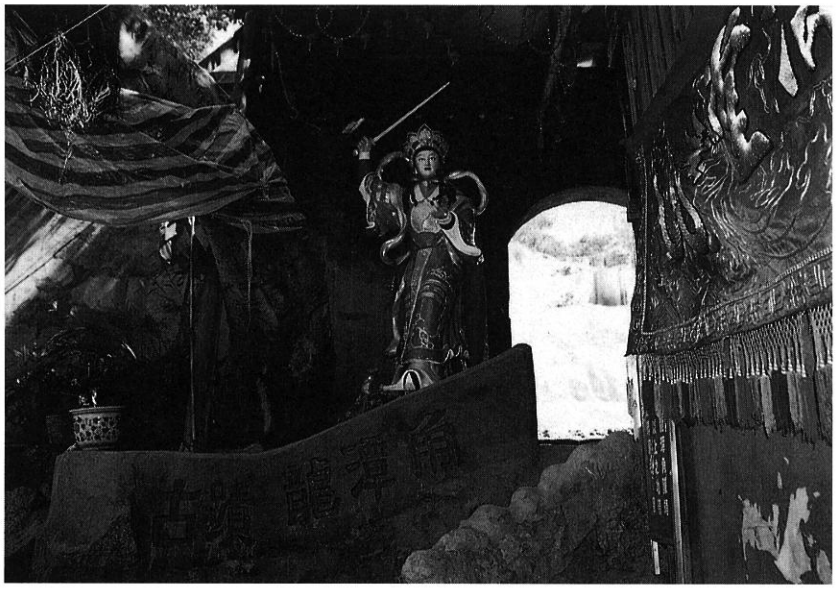


図版 1　下渡の陳靖姑故居。福州市倉山区工農街の家屋の密集したところに位置している。再開発の計画があり，いずれなくなる予定だという。

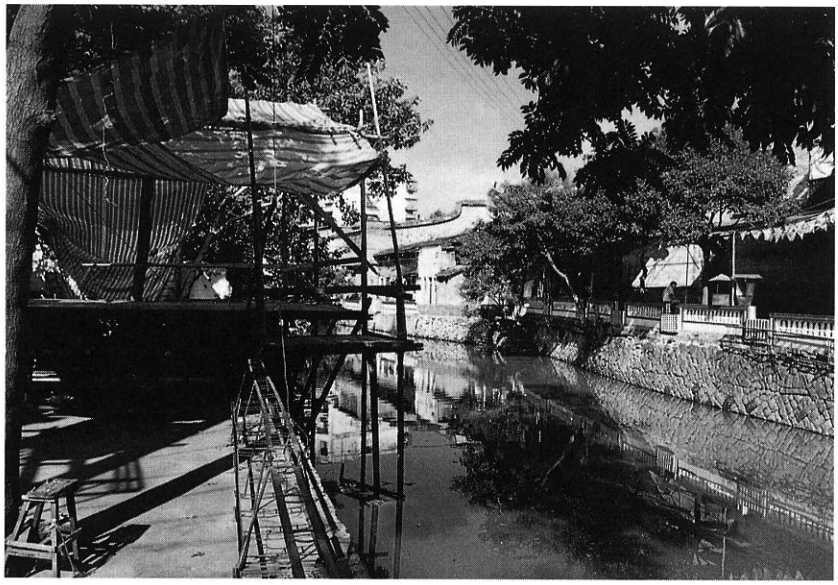
図版 2　陳靖姑故居にまつられた順天聖母。



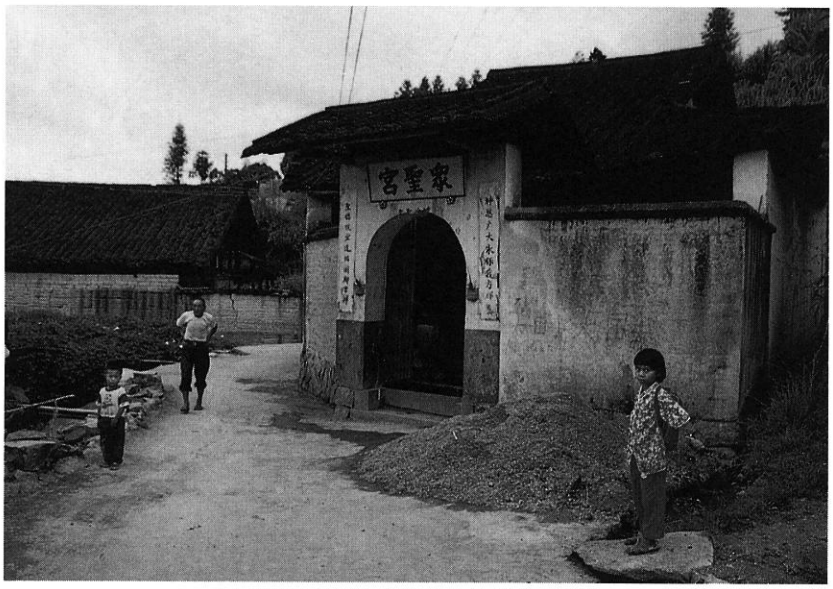
図版 3　福州市内を流れる閩江。上流地域への重要な交通路で，かつては飲料水としても用いられた。現在は汚染が進んだため，市政府はその浄化に乗り出している。



図版 4　閩江に臨む龍潭角。身重の陳靖姑は生前ここで，人びとのために雨乞いをし，命を落としたといわれる。

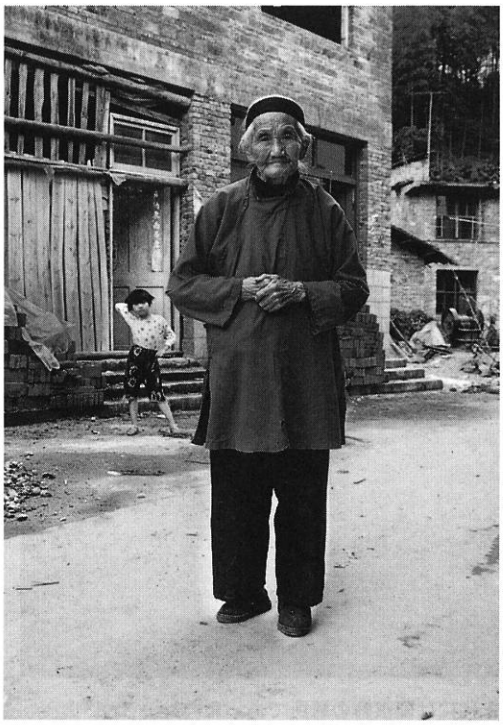


図版5　福州市内下杭路，張聖君廟の前の趣ある景観。舞台があって7月22，23日の祭日は芝居もかかってにぎわう（23日は神の誕生日）。

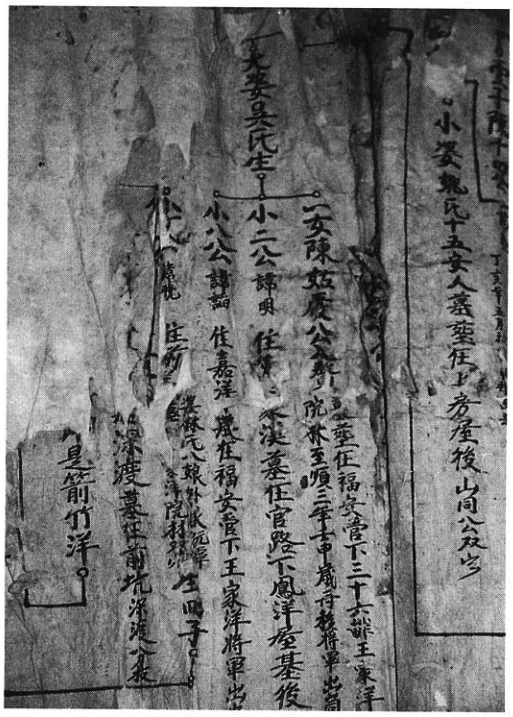


図版6　寿寧県下房村の衆聖宮は正月の祭儀の舞台である。ここを中心とした。陳氏一族のまつりがすなわちムラまつりとなる。

図版８　衆聖宮に保存されている華光大帝。下房村では一年おきに陳靖姑と華光大帝の長編の物語を傀儡劇で演じる。額に天眼がある。



図版10　下房村の93歳のおばあさん。生後８カ月で童養婿として陳家に送られた。実家が寿寧県の中心部にあったので村での通称は「阿県婆（アシェンポ）」。仮に東京から嫁げば東京婆とよぶ。

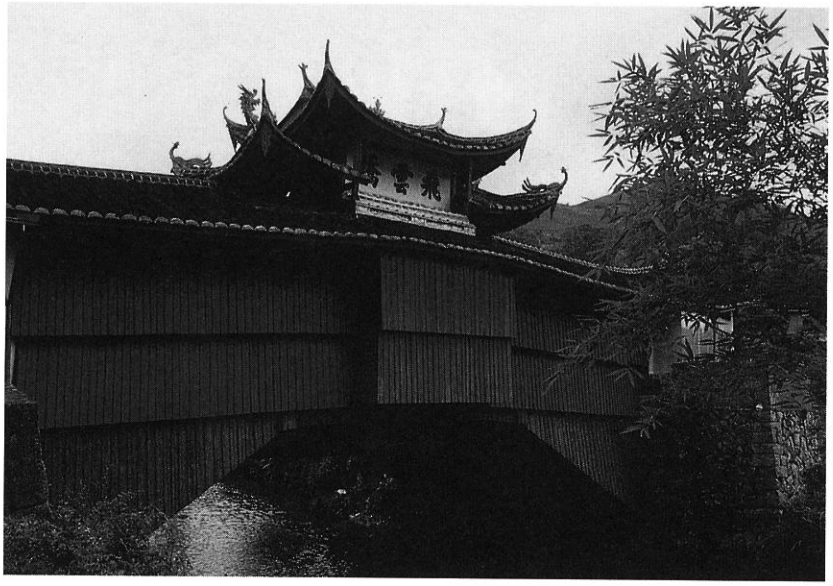


図版11 『陳氏宗譜』。宋代からのものという。陳小四の正妻「大婆呉氏」にはむすめがいて，これが第一番目に記されている。女子の地位は必ずしも低くはなかった。

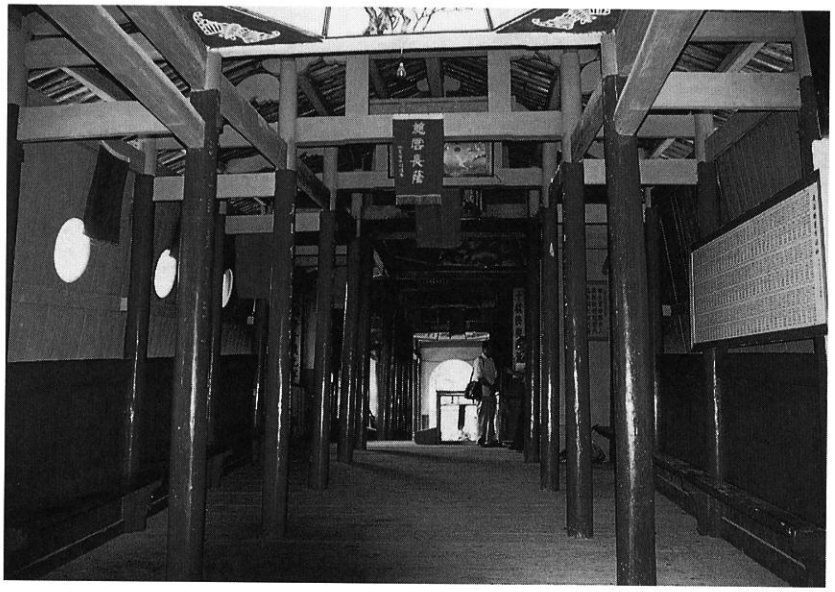
図版12 県の中心部にある三峰寺。宋代には陳洪軫の居所であった。

図版13　宗伯紀念堂の陳洪軫像。965年の進士，のち礼部尚書すなわち宗伯にいたる。990年に下房村に移居。

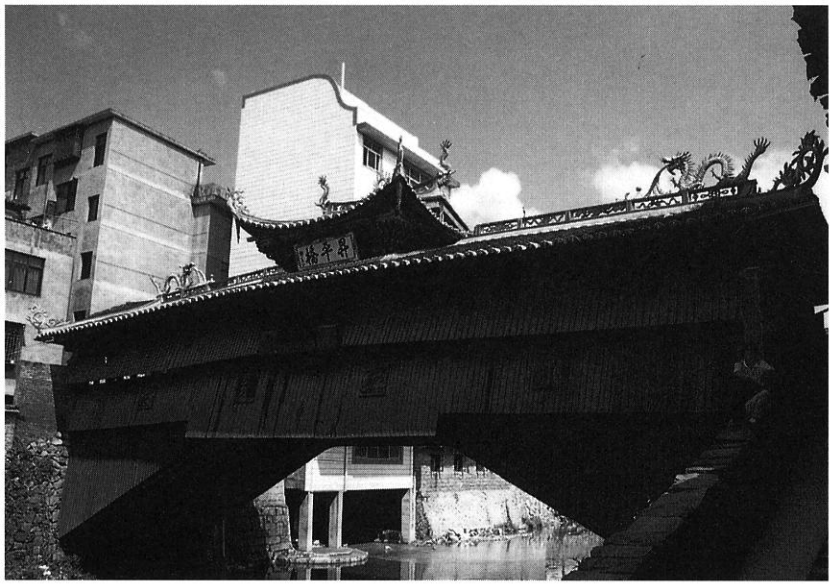
図版14　風水にのっとって作られた陳洪軫の墓。1986年に全面改築した。



図版15　明代のかたちを伝えるといわれる飛雲橋。寿寧県鰲陽鎮後段村。



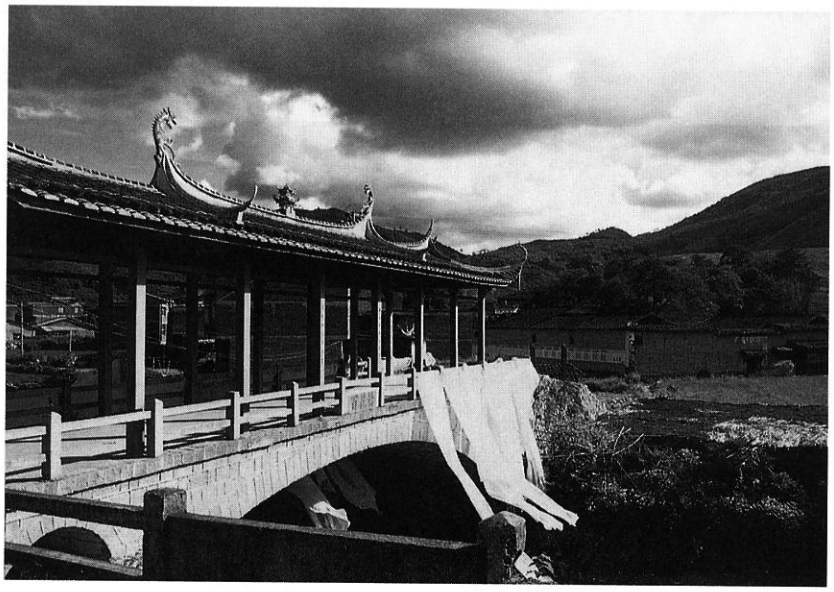
図版16　飛雲橋の内部。右奥に陳靖姑ほかの三奶夫人をまつる。



図版17　寿寧県の中心部にある昇平橋。明代の創建，清の乾隆43年（1778）に重建。なかに馬仙がまつられている。

図版18　寿寧県坑底橋の元帥宮にある田公元帥。額に蟹の絵がみえる。

図版20　古田県臨水祖廟の陳靖姑。



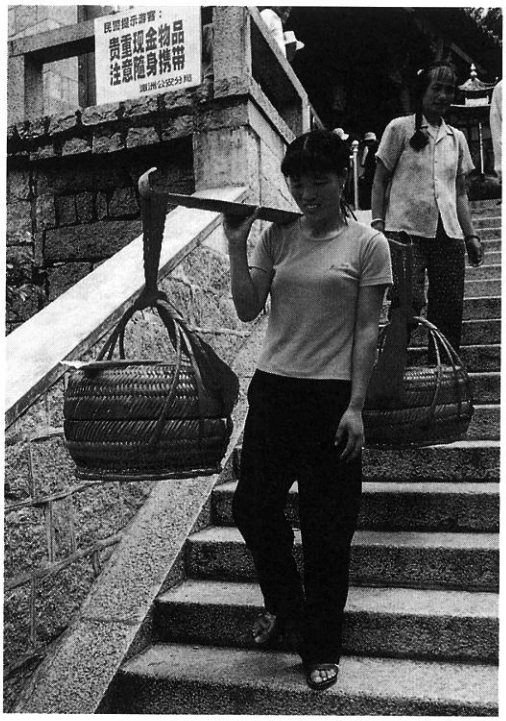
図版22　臨水祖廟の近くにある百花橋。陳靖姑とは密接な関係があり過橋の儀ではこの橋を通過する。この右側に築造後200年ほどになる大きな農家の土塀がみえる。その家の左背後にかつて陳靖姑と夫の劉杞が住んだというところがあり，現在は廟となっている。

図版23　200年になる古い家を守る陳愛雪さん（76歳）とその孫。愛雪さんは学校教育を受けたので字の読み書きができる。この家には「霜姿雪質」という女性を称える額がある。それは嘉慶5年（1800）に古田県の知事から与えられた。古田県大橋鎮中村。

図版24　莆田市江口鎮の東嶽廟で息子の健康を祈る婦人。みずから祈祷するばかりでなく，劇団に頼んで奉納芝居を催した。

図版25　一家の依頼を受けて昼夜演じられる芝居。近隣のお年寄りたちがけっこう見物している。

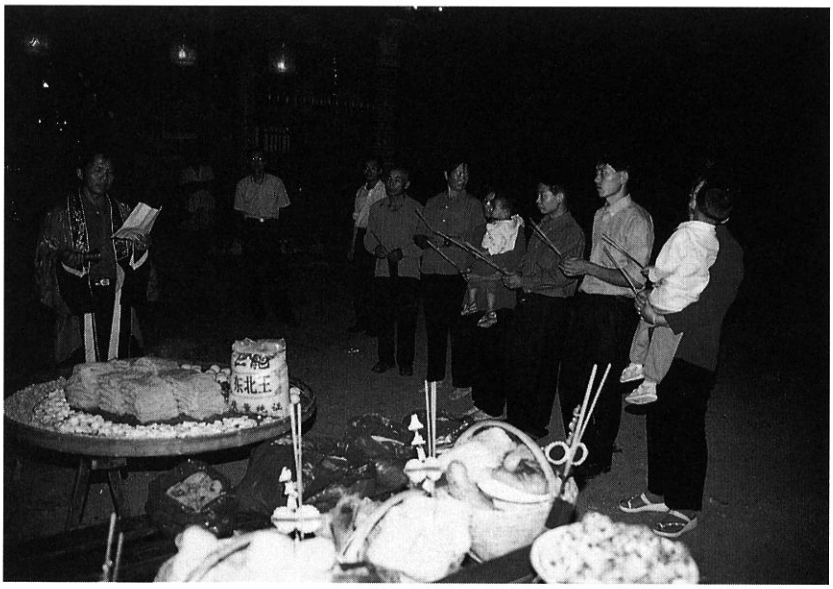
図版26　江口鎮厚峯村の聖寿禅寺の仏堂落成式を祝う楽隊。赤い旗に「黄石鎮清前村　満天霞十音八楽隊」と記されている。左手前に八角琴，右端に三絃，背中の者は和尚箫という楽器を弾いている。



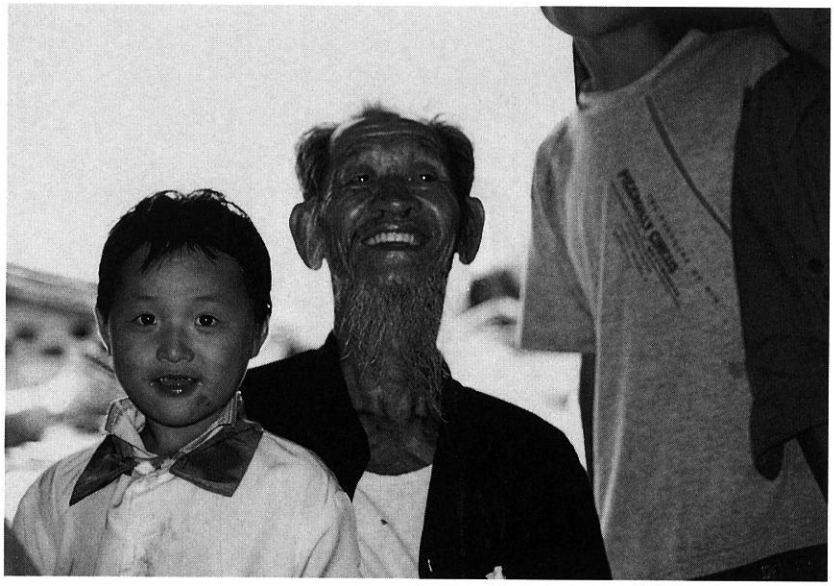
図版28　莆田県湄州島の媽祖廟前。媽祖への供物を担い籠に入れてやってきて，近くの村に戻る母子。

図版29　五歳の息子の成長と家業繁盛の祈りを込めて傀儡戯が奉納された。その主役の母子。子の頭にかざしたのは長寿を願っての物「吉利（ジリ）」。莆田市城廂区城南郷小厝村。

図版30　奉納の木偶劇『白桂林』。



図版31　劇が終わると，傀儡師は法師の役を兼ねて神送りの儀をする。

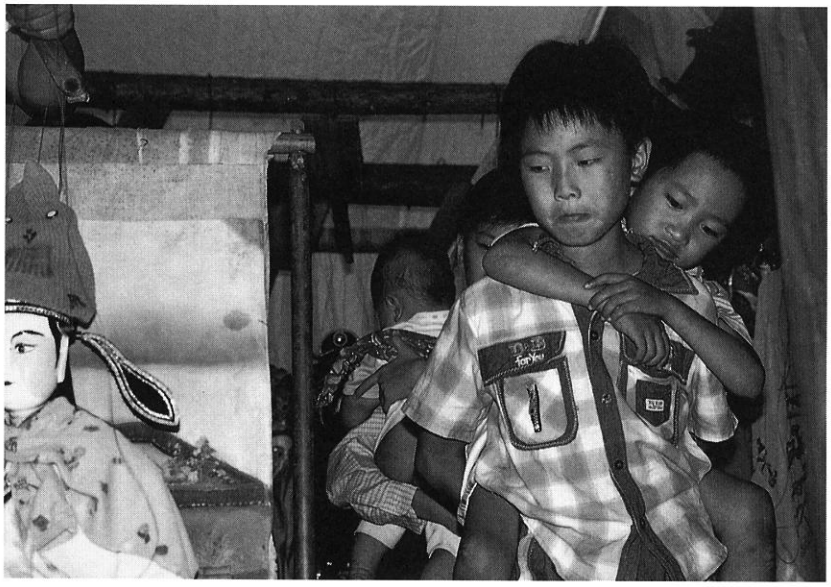


図版32　許阿発さん，72歳。祖父の代からの傀儡師。莆田県忠門鎮坂尾村。

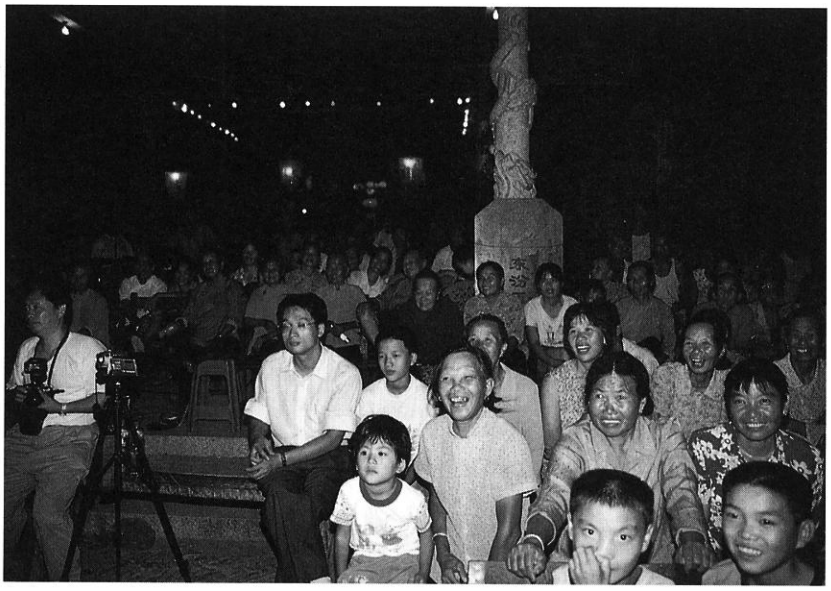
図版33　許阿発さんの家にまつられる戯神楊公太子。毎晩，拝む。また，傀儡戯をする前には舞台の袖でこの戯神をまつる。

図版34　三教の「先生」たちは独特の走りの儀をみせる（五方八卦の儀）。衣服の背に八卦が描かれている。莆田市城廂区龍橋村。

図版37　皇太子は病を克服して第二代の皇帝になる。北斗戯の物語は一応これで大団円を迎える。



図版38　北斗戯の末尾には必ず過橋がおこなわれる。今回の依頼者の家の主役，足の不自由な7歳の長男と生後間もない二男が臨水夫人に先導されて百花橋をめぐる。



図版40　夜10時半過ぎまで，傀儡戯の熱演はつづき，人びとはこれを心から楽しんでいた。見物者の大半は女性たち。生きている共同体そのものだ。